

唯見る山麓の大岩面(綠泥岩片)に見上る許りの佛像を刻み在り高さ八丈と稱するも、實は四丈有餘に過ぎず。其他無數の小佛像を彫刻し、莊嚴神に通じ、雄勁鬼を服し、人をして覺えず崇敬の念を惹起せしむ、蓋し唐の貞觀年中の作に係ると云へるも何人の手に成りしかを審にせず。途中穴居の民多く、且つ果樹林に富み、其種は概ね柿、棗、梨子等とす。

斯て山頭嘴シャントース亭屯坡頭ダントンを過ぎ、馬家堡に出づるや、堡ありて人家なし。二堂を経て冉庄に到れば、土寨ありて、其の附近に亦人家なし。次で飲馬堡、七里堡を過り行程約十一里餘、豫定の如く長武に入れり。

道路は一般に平坦なるも、胡家郷、山頭嘴の二所は稍々急坂を成し、山頭嘴、大佛寺の二所は路面岩石より成りて、幅一米突乃至三米突あり、南側即ち山麓は急斜面、北側は平地なるも、往々斷絶地を交へたり。地勢は、邠州亭屯間は其の南北に一連の山を望み、比高約五百米突、相距る約三百或は一千米突、其の中間に涇河ありて、地形自ら狹隘、其れより長武迄は開濶なる臺地を成せり。

途上多數の車馬黃蠟を馱載して、東陽より邠州に運ぶを見る、且露國人、獨逸人各、